

コミュニケーション能力とパーソナルスペースに関する研究

2050816

柴田 和輝

1. はじめに

パーソナルスペースには様々な定義があるが、渋谷によれば「自我の拡大した空間」、「自己を庇護する空間」、「コミュニケーションの空間」の3つに分類できる。そしてこれらに共通することは、パーソナルスペースとは人の体を取り巻く泡のような空間であり、その人と共に持ち運ばれ、さまざまな人間関係をより円滑に行うために伸縮するような性質を持っているということである。本研究では、パーソナルスペースを「コミュニケーションの空間」として捉え、コミュニケーション能力がパーソナルスペースに与える影響について検討する。その方法として、本研究ではコミュニケーション能力を測るために「Kiss-18」と「特性シャイネス」の2つを心理測定尺度を用いた。またパーソナルスペースを測るために、投影法のイメージによる測定法を用いて、被験者の持つ普遍的なパーソナルスペースを測定した。これらの結果を統合して分析した。

2. 方法

2.1 調査対象

13歳～60歳の25名(男女両方を含む)に対して、心理測定尺度とパーソナルスペースに関する調査紙を配布し、回答を得た。

2.2 心理測定尺度

Kiss-18は、菊池(1988)によって作成された尺度で、社会的スキルを身につけている程度を測定する。この尺度は最初に、ゴールドSTEINら(1986)のリストをもとに、50項目から成る質問紙尺度作成し、項目-全体相関の高い18項目を最終的な尺度項目として選んだものである。各項目を1～5の段階評価尺度により評価し、合計点が高いほど社会的スキルを身につけていることを示す。

特性シャイネス尺度(Trait Shyness Scale)は、相川(1991)によって作成された尺度で、リアリーの定義に従い人格特性としてのシャイネス

を測定する。近年シャイネスをある特定の社会的場面で生起する感情的な反応と、特定の場面を越え人々が一般に持っている人格特性とに区別するようになっている。リアリーは、後者のシャイネスを“特定の社会的状況を超えて個人内に存在し、社会的不安という情動状態と对人的抑制という行動特徴をもつ症候群”と定義している。16項目から成り、その内、1, 5, 8, 11, 13, 15番は逆転項目である。各項目を1～5の段階評価尺度により評価し、合計点が高いほど、社会的不安という情動状態と对人的抑制という行動特徴を持ちやすいことを示す。

3. 結果と考察

Kiss-18とパーソナルスペースの関係

前・左横方向については、対象の主効果(前: $F(3, 54)=9.94, p < .01$; 左横: $F(3, 54)=9.01, p < .01$)と交互作用が有意だった(前: $F(3, 54)=2.84, p < .05$; 左横: $F(3, 54)=2.91, p < .05$)。グループの単純主効果を検定したところ、前方向のみ知らない異性において有意傾向だった(前: $F(1, 18)=3.35, p < .10$)。また対象の単純主効果を検定したところ、低スキル群において有意だった(前: $F(1, 54)=11.71, p < .01$, 左横: $F(3, 54)=11.06, p < .01$)。対象の単純主効果について多重比較を実施した結果、低スキル群では親しい同性、異性に比べて、知らない同性・異性の方がパーソナルスペースが大きくなることが分かった($p < .05$)。

右前・左前・右横方向については、対象の主効果(右前: $F(3, 54)=8.81, p < .01$; 左前: $F(3, 54)=8.94, p < .01$; 右横: $F(3, 54)=9.02, p < .01$)と交互作用が有意傾向だった(右前: $F(3, 54)=2.67, p < .10$; 左前: $F(3, 54)=2.50, p < .10$; 右横: $F(3, 54)=2.67, p < .10$)。対象について多重比較を行った結果、スキルによらず、親しい同性・異性に比べて、知らない同性・異性の方がパーソナルスペースが大きくなることが分かった。ただし交互作用が有意傾向であり、低スキル群における対象の単純主効果が有意

表 1: パーソナルスペース (KISS-18)

	前	右前	右横	右後	後	左後	左横	左前
親しい同性								
低スキル	0.8	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.7
高スキル	0.8	0.8	0.7	0.9	0.8	0.8	0.8	0.8
親しい異性								
低スキル	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.7	0.6	0.7
高スキル	0.7	0.7	0.7	0.8	0.7	0.8	0.8	0.8
知らない同性								
低スキル	2.1	2.0	2.0	2.1	2.2	2.2	2.1	2.1
高スキル	1.2	1.2	1.2	1.6	1.7	1.7	1.2	1.2
知らない異性								
低スキル	2.1	2.0	2.1	2.2	2.3	2.2	2.1	2.0
高スキル	1.2	1.2	1.1	1.3	1.4	1.3	1.2	1.2

であった (右前: $F(3,54)=10.56$, $p < .01$; 左前: $F(3,54)=10.44$, $p < .01$; 右横: $F(3,54)=10.72$, $p < .01$) ことから, 高スキル群に比べ, 低スキル群の方が対象がより強く影響した可能性が考えられる。

後・右後・左後方向については, 対象の主効果のみ有意だった (後: $F(3,54)=12.60$, $p < .01$; 右後: $F(3,54)=10.63$, $p < .01$; 左後: $F(3,54)=10.80$, $p < .01$). 多重比較の結果, 高・低スキル群ともに, 親しい同性・異性に比べて知らない同性・異性の方がパーソナルスペースが大きくなることが分かった。

表 2: パーソナルスペース (特性シャイネス)

	前	右前	右横	右後	後	左後	左横	左前
親しい同性								
内向性	0.7	0.6	0.5	0.5	0.5	0.5	0.6	0.7
外向性	0.8	0.6	0.6	0.8	0.8	0.8	0.6	0.6
親しい異性								
内向性	0.6	0.7	0.7	0.6	0.6	0.7	0.7	0.8
外向性	0.7	0.7	0.6	0.7	0.6	0.7	0.6	0.7
知らない同性								
内向性	2.0	2.0	2.0	2.1	2.2	2.2	2.2	2.1
外向性	0.9	0.9	1.0	1.6	1.6	1.6	1.0	0.9
知らない異性								
内向性	2.0	1.9	2.1	2.2	2.2	2.2	2.1	2.0
外向性	1.2	1.1	1.2	1.4	1.4	1.4	1.2	1.2

特性シャイネスとパーソナルスペースの関係

前方向については, 対象の主効果 (前: $F(3,54)=9.94$, $p < .01$) と交互作用が有意だった (前: $F(3,54)=2.84$, $p < .05$). グループの単純主効果を検定したところ, 知らない同性において有意傾向だった (前: $F(1,18)=3.35$, $p < .10$). また対象の単純主効果を検定したところ, シャイネス高群において有意だった (前: $F(1,54)=11.71$, $p < .01$). 対象の単純主効果について多重比較を実施した結果, シャイネス高群では親しい同性, 異性に比べて, 知らない同性・異性の方がパーソナルスペースが大きくなることが分かった ($p < .05$).

右前・左前方向については, 対象の主効果 (右

前: $F(3,54)=7.61$, $p < .01$; 左前: $F(3,54)=8.04$, $p < .01$) と交互作用が有意傾向だった (右前: $F(3,54)=2.40$, $p < .10$; 左前: $F(3,54)=2.50$, $p < .10$). 対象について多重比較を行った結果, シャイネスの高低によらず, 親しい同性・異性に比べて, 知らない同性・異性の方がパーソナルスペースが大きくなることが分かった. ただし交互作用が有意傾向であり, シャイネス高群における対象の単純主効果が有意であった (右前: $F(3,54)=9.17$, $p < .01$; 左前: $F(3,54)=9.49$, $p < .01$) ことから, 高スキル群に比べ, 低スキル群の方が対象がより強く影響した可能性が考えられる。

右横・左横・右後・左後・後方向については, 対象の主効果のみ有意だった (右横: $F(3,54)=7.73$, $p < .01$; 左横: $F(3,54)=8.19$, $p < .01$; 右後: $F(3,54)=9.57$, $p < .01$; 左後: $F(3,54)=9.83$, $p < .01$; 後: $F(3,54)=11.14$, $p < .01$). 多重比較の結果, シャイネス高低群ともに, 親しい同性・異性に比べて知らない同性・異性の方がパーソナルスペースが大きくなることが分かった。

4. おわりに

本研究では, コミュニケーション能力がパーソナルスペースに与える影響について調査・検討した。

本研究における今後の課題を以下に記述する。今回, パーソナルスペースの調査方法では, 被験者のイメージをもとに回答を得たが, より正確なデータを得るために実測法を用いて再調査をしたい。また, その内容として, 各対象の人物が被験者に向かって接近していき, 被験者が気詰まりや不安を感じたところを境界とする接近実験を行ったが, これとは逆のパターンである, 被験者が各対象の人物に向かって接近していき, 被験者が気詰まりや不安を感じたところを境界とする被接近実験を行い, 違ったデータがとれないか調査したい。